の寝床

森茉莉

新潮社

枯葉の寢床
一九六二年七月二六日印刷
一九六二年七月三〇日發行
著者森茉莉
發行者佐藤亮一
發行所株式會社新潮社
東京都新宿區矢來町七一
電話東京三四一局七一一一
振替東京八〇八
塚田印刷、神田加藤製本
定價三〇〇圓

© 1962 Marie Mori
亂丁本はお取替へします。

目次

枯葉の寝床　5

日曜日には僕は行かない　125

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

森茉莉創作集

枯葉の寝床

――いざうたへ、葬りの歌を――

ポオ

厚木街道の外れ、藪内郡の、一塊りの家の集團から一軒遠く離れた家がある。街道から下へ二度大きくうねる細い道が、荒れた畑地を通り、その畑地もすぐになくなつて、その大きな竈のやうな建物にぶつかる。

家を遮つてゐる櫟の林は右端のカア・ウェイを殘して、建物を圍んでゐるが、向つて右手の庭は夏も枯葉に埋まつた森につづいてゐる。黄色い煉瓦を敷きつめたカア・ウェイの片端には一列に白い石が嵌められ、深夜の判別にそなへてゐる。大きな農家のあつた跡のやうで、左手裏には鷄か兎でもゐたらしい、短い梯子で登るやうになつた小屋があり、そこに煖爐用の薪が突つ込まれてゐる。

處々缺け落ちた外郭に比して内部は豪奢なものをひそめてゐて、窗なぞは西班牙の城に模

した鐵の格子が、分厚い硝子を嚙んで、丸い鱗の形にがつしりと組まれてゐる。建物は森に向いて手前の寢室と浴室、後の書齋と書庫、次の間との二棟に分れ、圓蓋の屋根でつながり、間の空地は暗く、裏から見ると右手の庭の何もない花壇の床と鐵製の椅子、葡萄酒の樽に植ゑた月桂樹(ロオリエ)が陽を浴び、その向うに森の塊が黑く、沈まつてゐる。夜は百米はある圓蓋の上部を蒲鉾型に殘して左右に鐵の扉が締まる。鐵の扉には人の背より少し高い所に網目格子の窗が開いてゐる。晝の間は扉はそこらの石塊(いし)をおいて內側に、止めてあり、圓蓋の天井には太く荒い鐵棒で圍まれた裸電燈が多くの日消し忘れられて、點つてゐる。

今しがた街道に大型の車の滑る音がしたやうだつたが、窗の中の石に圍まれた部屋の眞中に、どつしりとおかれた樫の寢臺(ベッド)に枕の上に乘り出して肱をつき、たて籠めたパル・マルの煙に眉間にたて皺をよせ、眼と眉をくしやくしやに、頰から脣を微笑(わら)つたのかと思ふやうに歪めた男は、

——男は Guylan de Rochefoucaud(ギランドロシュフコオ) といふ、南フランスのトゥルヌヴェルの貴族を父に、日本人の頭のいい、健康な給仕女を母に持つて生れた、三十八歳と三ヶ月になる美丈夫である。父も母も既(も)うない。父の本國に莫大な遺產を管理してゐるフィリップをお

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

いて、送金をさせてゐる。佛文の助教授で同時に中堅作家として名を成してゐるが、金と暇のある寢臺小說の書き手として一部では反感を持たれてゐる。大きな二皮目は豪毅な氣質をひそめてゐるが、生來の耽美主義者である、ものに飽きたやうな暈りがその光を蔽つてゐる。——

街道のある方向に遣つた眼を元に戻し、再び枕を深く窪ませて、掛布の下に半裸の體を沈めた。

どこからか降つたやうに、一人の青年の後姿が細い道の上に現れ、家全體を朧りと透かしてゐる櫟林にかかつた。腰の邊りが心持もたつく、少女のやうな歩きやうだが、身は細く締まり、敏捷な體つきである。

枯葉を踏む黑い尖端の尖つた伊太利製の靴は林の中を器用に分け入つて行く。ギランと青年

——青年の名は通稱を山川京次と言ひ、成城學園に籍をおいてゐるが講義は出たり出なかつたりで、專らギランの相方として寢臺と、ドライヴと、ナイトクラブ、キャバレ、狩獵に日を暮してゐる。ギランによつて荔於と名づけられてゐる。——

とがつけた、あるかないかの道である。レオが氣紛れに下枝を折つて歩くので、レオの背の高さから下は枝がまばらに空いてゐる。脚音を聽きつけたギランは寢臺の背に向いて上眼遣ひに大きな眼を白く、瞳を上瞼にひきつけた。刺戟物が眼に入つた人のやうな、血走つたもののある眼が瞬間裂ける程、見開かれた。熱い眼である。

夜が明けたか明けぬかの薄暗い林の、梢の暈けた網が、忽ち青年の皮ジャンパアの後姿を隱した。

古い板を横にして打つけた、竈の焚き口のやうな入口の前に來た時、遙かな森の方で小鳥の聲がした。

顎をすくつて仰向いた、小さな牛乳色の横顔が、薄明の中に鮮かに浮び上つた。十七か、八か、青年といふよりは少年のやうな顔である。薄皮の白い皮膚、灰色が沈んだ黑い瞳が瞬き、小さな反り氣味の鼻、剝いたばかりの果實のやうな、濕り氣のある頰、强く嚙まれてゐたやうな、小さく膨んだ脣は、接吻で熟した果實である。その脣にかすかな微笑ひの影がさした。

ふと身を翻して、レオは足音を忍び、焚木の置場に立てかけてある三段程ある低い梯子

をとり、右側の窗に廻つた。窗の枠に梯子を立てると、消炭色のジインパンツの足が猿のやうに段を登る。

半身を起した男の眼に、硝子を透して中腰に腰を立て、窗硝子に掌をあてたレオの姿が映り、直ぐにずりおちたやうに、微笑つた顔だけになつた。小さな鼻を中心に皺をよせたやうな、微笑ひである。

ギランの眼が窗へ一杯に開かれ、微笑ひが眼の底で光る。棧の外れてゐることを知つたレオは窗を上げて、飛び込んだ。石の床を靴の音が摺り、片手を高く壁に突つかひ、靴を脱ぐ。

ギランは半身を起し、再び枕に肱をついた。

「早いね」

「だつて車返すつて言つたでせう?」

朝の森の空氣と一緒に少年の、青い木のやうな嫩さが、木綿の匂ひに包まれて、流れ入つた。

レオはギランの腹の邊りに撓やかに凭れかかり、ギランの腕に頰を優しくすりつけ、首を起して微笑ひ、又別の側の頰をすりつけながら、冷たい小指をギランの小指にかけて、締め

つけてゐる。
「車は鍵かけて來たか？」
「大丈夫よ」
薄藍色のジャンパアとデニムの洋袴（ズボン）に包まれたレオの體が男の上に乘りかかる、男の手がその上體を抱き上げ、レオの顏が男の顏の眞上にくる。下眼にしたギランの熱い眼が、レオの脣に集中し、突き上げた顎の上の輕く尖らせた脣が接吻を催促する。
レオの手が男の頰から顎にかかり、薄紅い脣が稚い技巧（テクニック）を見せて、吸ひ寄せられるやうにギランのそれに合はさる。脣を離す小さな音がし、レオは紅みのさした頰を男の頰にくつつけ、陶醉（うつとり）とした眼を上げ、その眼を落すと、細い人差指がギランの鼻の線を辿り、脣の合せ目に落ちる。男の脣が素早く指を銜へこみ、輕く當てた齒が强くなる。
「駄目、駄目つたら……接吻（キッス）して上げるから放してよ」
ギランは撓やかな指を太い指に支へ、二度、三度齒をあてたが、今度は青年の顎に手をかけて、言つた。
「アロン、アンブラッス」（さあもう一度）

再び頭と頭とが楔のやうに嚙みあふ、レオの體から次第に力が拔け、背中の窪みに廻つたギランの腕が器用にレオの體を下に抱きこんだ。

斑の羽の禿鷹は、窗から飛びこんだ小鳥を、肉慾の爪の下に、抑へつけたのだ。

長い時刻が經ち、半身を起した男の下に、レオは瞳を上にひきつけて、ぐつたりとなつてゐた。ギランが腕をレオの背中にかひ、持ち上げる。弓なりに仰け反り、半ば脣を明けたレオの下眼遣ひの凝視が男の顏にまじろぎもせずに止められる。短い間があり、男の全身が火になつた。脣がひきよせられ、逃げるレオの脣の方向へ弛い楕圓を描いて追ひ廻す。ギランの手がゆつくりと、レオの衣を脫がせはじめた。

部屋の外は次第に明るくなり、森も街道も眼醒め、太陽の薄い黃金色が竈の家を圍んだ頃、二人の男は寢臺の背に背をもたせて、並んでゐた。

羞ぢらひをおびたレオの片腕が裸の胸に當てられ、上眼遣ひに男を窺つてゐる。ギランは逞しい片腕を後首にあて、男神のやうな横顏をみせ、充血した眼はレオの胸にあてられてゐる。

レオの眼が伏せられ、再び男を上眼に見た。

「駄目よ、もう、ねえ、駄目……」

レオは翼のやうに交叉させた腕で胸を抱き締めてギランを見たが、腕を解くと首の後に組み、腋窩を露はに、意地の悪い眼がギランを見て微笑つた。

やにはに男の手が延び、レオは捲きこまれ、二人の體は蛇の繩になつて絡み合ひ、再び寢臺に、倒れた。

二つの生きてゐる塑像は上になり下になり、絡みつき、左に右に轉がる。ギランの愛撫の下で、稚いミケランジェロの「奴隷」は、のたうち、かすかに呻き、荒い翼の音の下で小鳥の翼は折れ、戰き、鋭い嘴の音の間々に、レオの短い、呼吸づかひが、混つた。

*

浴室に通ずる扉の傍にある、煖爐の上の時計の針が十二時を廻つた頃、二人は浴室に入り、浴室の奥のカアテンの中で、二つ並んで取りつけられたシャワアにかかつてゐた。

「今日早く車でどこか行かうと思つたのよ」

天井に嵌めこまれた鏡に眼を上げながら泡を立てた髪の毛をかき廻してゐたレオが、隣の

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo